



2007年

SORA 17号

晴夜 (17) | 1

柴田 佐知子

闇汁に龍の鱗を入れたると

だんだんに重たくなりて独楽倒る

墨を磨るときに放心雪が降る

狐火のひとつ鏡に閉ぢこめし

山まろし筑紫やさしと囀れり

—「俳壇」三月号より—

伊藤通明先生句碑開き

冬あたたか集ひて訛異にせり

焚火はや龍の丈なす句碑開き

黒々と龍の句碑立つ初山河

冬深む古墳に色を閉ぢこめて

声

高倉和子

母のこと思へば父や冬桜

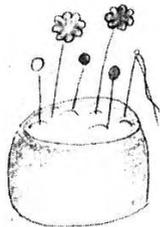
初夢に少しの嘘を加へたる

水鳥や打ち捨てられしごとき石

火照りたる焚火の顔のまま戻る

切り傷の痛みに冷えのつのりけり

電子音ばかりの部屋や日脚伸ぶ



山を焼く煙は重く流れけり

春寒し本堂に目の慣るるまで

鷹鳩と化して群れたる神の前

爪先の自由な靴や山笑ふ

震へつつ大きくなりし石鱗玉

憑き物の落ちたるさまに春眠し

びつしりと海の高さに目刺干す

声出してみればあたたか一人の夜

春の山鯉やはらかに泳ぎけり

冬の滝

中田みなみ

晴るる日は新宿見ゆる大根掛

雪吊りのなかの落日憂国忌

座布団のまだ仄温き歳暮品

綿虫の芯に物干竿通す

煮大根の味滲むまでと引止めし

杵上ぐる度に山容れ年の暮



初日記人に優しく過さむと

盃を唇にし眺め初衣桁

猫の寄る密教寺の火消壺

密教の火のうつくしき雪催

陸橋の下の灯を見る懐手

寒垢離のうごめく唇を畏れけり

寒垢離の飛沫毛皮に玉となり

菜畑のことに清しき二月かな

滝の音山の眠りに従へり

主よ

荒井千佐代

連山の靄はれ上がる懸大根

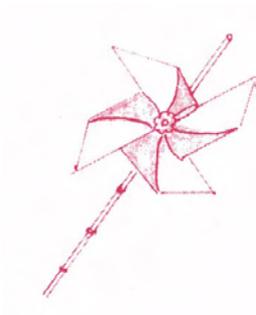
鞍上の背筋まつすぐ冬の雲

小児病棟へパンジーの道つづく

虎落笛ミサ澹々とすすみをり

キリストの手足に釘や聖菓に刃

シリウスや生命線のあはあはと



刃物屋の廂のふかし実万両

極月や白粥に塩すこし振り

しまきぐも積木はいつも赤より積む

潮風に翅をひろげて遊蝶花

冬の日や園児眠れば吾も眠し

オルガンの鞆ふいこの湿り弥撒初め

天国の門は見えしか寒鴉

ふぐと汗身ぬちに余燼くすぶらせ

主よ主よと指組み眠る冬銀河

空作品抄

柴田佐知子

SF映画を見ているような不思議な句である。「牡蠣の殻」という言葉が絶妙の効果をあげている。人間が減び去った無気味な静寂に包まれた地球…というように読む者がそれぞれにイメージし、それぞれの映像を結ぶであろう。

雪原に立たされ祓の一升瓶

田島 洋子

新潟松之山の前書を持つ作品の中の一句。墨を塗ってまわる小正月の行事の一場面である。その前書が無くて十分に立ち上がってくる作品である。「立たされ」一升瓶の景が鮮明。へ村あげて墨付正月迎へけりも楽しい。

寒風に姿さし出す金閣寺

星原 悦子

恋しき人いづこと問へば野山枯る
旅籠屋の椿の如き一夜かな

〃
〃

独自の感性が光となって作品を押し出してくる。さし出された金閣寺の鮮烈な姿、「恋しき人いづこと問へば」から「野山枯る」の詩空間を一気に広げる展開「旅籠屋の椿の如き」という意外な比喩の説得力。感性というほかはない。

綿虫の芯に物干竿通す

中田みなみ

寒垢離のうごめく唇を畏れけり

〃

白い綿のような分泌物をつけて飛ぶ綿虫は、雪が降るようなその姿から雪虫とも呼ばれる。ふわふわと飛ぶ雪虫の宙に掛け渡す物干竿がすつと伸びる。日常のささやかな景が面白く詠みとめられている。表現の力があつてこそその面白さである。二句目は寒中の水垢離。「うごめく唇を畏れけり」による寒垢離の一心の姿の描出に畏れ入った。うまい。そして瑞々しい。

立ち泳ぐやうに寒林ぬけにけり

服部 早苗

すべてのものを削ぎきつた寒林は以外と明るい。そこを過ぎるとき「立ち泳ぐやうに」の感覚に共鳴する。

地球にはだあれもない牡蠣の殻

あさなが捷

晩く来る倅せもあり冬至風呂

安武 晨子

悠々たる作者の氣息がこころよい。「晩く来る倅せ」と
香りたつ柚子湯がほのぼのとした風合いを醸し、倅せは
晩くやってきた方がよさそうに思えてくる。

一切の物音消して屠蘇祝ふ

吉村 摂護

一切の物音が消えるはずも無かろうが、このように誇
張し断定することで、新年を迎える肅とした雰囲気は伝
わってくる。

集金箆まづ並べけり猿廻し

野畑小百合

今は年中猿の芸を見せてくれる処もできたが、「猿廻し」
は新年の季語。正月に猿を舞わせては米銭を貰う門付け
が巡っていた。今はほとんど見ることがない。これは辻
芸であろう。見物人が金を入れる箆を「まづ並べけり」
が辻芸の様子をいきいきと捉えユーモラスである。

岡本太郎絵画館

百の眼に見竦められて冬の画廊

上村 和子

しんとした画廊「冬の画廊」と表されると更に硬質な
空間となる。絵を見る自分が絵の中の眼に見据えられる。
岡本太郎絵画館での作であれば尚更だ。

凍雲やはね橋上がる気配なし

矢野百合子

言葉が的確に置かれている。さりげない印象を与える
その技量は高い。

初雀仲間集めて来たりけり
こぼれるように地に下りてきた雀たち。「仲間集めて」
がまことに可憐である。

小川 涼

少年の思慕真直ぐに風揚がる
どこかぎこちない少年期。「少年の思慕」などと詠むと
甘く流れがちなのだが、堀江さんは「真直ぐに風揚がる」
と一氣に詠みおろし、清新な抒情に満ちた佳句に仕上げ
ている。

堀江 恵子

その他触れたかった句。

初夢に少しの嘘を加へたる

高倉 和子

キリストの手足に釘や聖菓に刃

荒井千佐代

如月や風の中なる羽ばたきも

永原 朱

飛ばされし歌留多持統の笑み給ふ

ふじの茜

間引菜漬く重しに重ぬる塩袋

桜 三奈子

地に降りし鴉輝く淑気かな

青木 朋子

だんだんに火色透きゆく桜炭

今井 春生

日向ぼこ母の着物を解きつつ

石川 叔子

冬夕焼農家のゆらぐ太煙

田代 貞枝

のうのうとした猫またぐ煤払ひ

山田 正子

枝折戸の音なく開く石路明り

森 裕子

川柳のやうな我が句や日脚伸ぶ

犬丸 勝子